
転生者は異の守護者

瑠宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は雲の守護者

【Nコード】

N5370S

【作者名】

瑠宇

【あらすじ】

よし、まずはじめに聞こう。「どこどこですか？」

気づいた時にはもうすでに遅く、あっという間にリボーンの世界に飛ばされました。

どうやら原作よりかなり前に飛ばされてしまい、しかも……イタリアだったんだよね……。

この作品は原作開始前から始まっており、現在もなお過去編まっしぐら中です。

オリキャラ設定（原作開始時）（前書き）

…？露ちゃん…

ひびい、ひびい、ひびい…！

（詳しくはあとがきで。）

オリキャラ設定（原作開始時）

出雲^{いずも} あいら

性別：女

年齢：13歳

身長：142cm

体重：38kg

誕生日：6月6日

双子座

血液型：B型

髪型：肩甲骨ぐらいまでの髪の毛先に軽くウェーブがかかっている
（たまにくくつたりもしている）

髪色：茶色

目の色：青紫色

性格：気分屋

甘いものが好きで、常に何か糖分をとっている

逆に苦いものと辛いものが嫌い。ピーマン？あんなの食べ物なんて呼ばないでほしい

勉強は平均よりも上で、運動は上

手先が器用 料理も得意

一人称：僕

嫌いな人間：自分だけで何もできないと決め付け、努力をしない人間

天風 華那（次参照） ナルシスト

自分のおかした行動に責任を取れない人間

好きな人間：常に努力をしている人
なんでも自分でやる人

シン

性別：男

年齢：本人いわくビックバンが起きた時と同じ年に生まれたいらしい

身長：172cm

体重：58kg

誕生日：12月31日と1月1日のギリギリの時らしい 山羊座

血液型：AB型

髪型：短髪、軽く立っている

髪色：藍色

目の色：黒色

性格：超のつく自由人

あいらを転生させた張本人で世界の守護神の一人

炭酸が好きでよく飲んでいるのをあいらは見かけている

武器やアイテムを作っであいらに渡しているので手先は器

用なんだと思われる

一人称：俺

嫌いな人間：気の合わない人間

好きな人間：気の合う人

あいら

あまかせ
天風 華那

性別：女

年齢：14歳

身長：156cm

体重：47kg

誕生日：9月20日 乙女座

血液型：A型

髪型：腰よりも少し短いぐらいのストレートの横髪を上の方で2
つにくくっている

（ゴキブリヘアとあいらは呼んでいる）

髪色：黒色

目の色：緑色

性格：八方美人

辛い物を好んで食べている

糖分は太るからとか言って極力とっていない

勉強は出来るが運動があまり得意ではない

努力せずにすぐ楽な方へと逃げる癖がある

獄寺のことが好き

一人称：私

嫌いな人間：なし

（あいらは苦手なだけで嫌いではない）

好きな人間：獄寺

オリキャラ設定（原作開始時）（後書き）

「さ～～～く～～～者～～～」

はっ、この殺気は…

「てめえ、いい度胸してんなあ？」

こ…？露っっいや、？露様！！！！！！

（省略）　？露ちゃんにぼこぼこにされてます。

「こっちは原作も入ってないよな？」

はい、すみません。

「まだまだ原作に入るまで時間かかるよな？」

はい、すみません。

「ただでさえ忙しいよな？」

はい、すみません。

「誤ってる暇があつたら、さっさとかけやてめえ！！」

ぎゃあああああ！！！！

はい、作者です。

『幸せのための送られもの』を中心にこちらを書いていくので不定期連載の１話一話が短編になるとと思いますが、よろしかったら読んでください。

10月30日　設定を少し改造

まあ、神様に会いました。（前書き）

うーん、
短いな、
おい。

まあ、神様に会いました。

「おい、起きろよー。」

そう言うと同じぐらいに頬をぺちぺちと叩かれる感覚。

「ふにー、…ふへっ！？ここどこ？」

目を開けた先に待っていたのは藍色の髪青年、そして何も無い黒と白の世界。

「お、起きたか。」

早速で悪いんだけど、時間が無いから簡単な事だけあいらに伝える。」

「へ？何で僕の名前を？」

「それもまた後で話す、とりあえずあいらに覚えておいて欲しいことは、お前が死んだ事だな。」

…What?

え…死んだの？

「で、あと『家庭教師ヒットマンREBORN!』の世界にトリックプしてもらう。」

「なぜ故に僕？」

「あ、原作の始まる数年前な。」

人の話を聞いてよ。

「あ、後イタリアな。」
しかもイタリアっておい…。

「軽く基礎能力上げといて、後軽く能力も付けとくから。」
軽くってどれ位なのさ。

「ま、詳しい事は次会った時になー。」

「へっ？」

今まで居た足場が崩れていく。

あ、これ死んだわ↑

「あ、後俺は神だから、そこん所よろしく。」

……は？

What?

神様だと！？ 拝んでおけば良かった。

ま、また会えるのを楽しみにしようっとな」

まあ、神様に会いました。（後書き）

ちなみになぜこんなにも短いのかというと、

PSPの文字制限？

リボーンの世界だあ！！！（前書き）

スクアークの話の方って難しいね。

リボーンの世界だぁ！！！！

おし、まずこの世界中の人に聞こう。

「ここ何処ですかー！！！！？」

神様と居た場所から一変しなぜかジャングルにいた。

「ちょ…本気で怖いんですけど…、誰か居ませんか？」

そう言っても答える人は一人としていない。

ガサガサ

「ひひひひ！！！！」

食べられる、そう思っただけ死ぬ覚悟はしたが何も起こらない。

おそろおそろ目を開けるとそこにはリボーンで見た事のあるロン毛の

「う”お”おい！！なんで餓鬼がこんな所にいんだ！！！！」

五月蠅い五月蠅いスクアーロがそこにいた。

「餓鬼とはなんなのさ！！！！僕は15歳だぞ！！！！」

「はあ？何言つてやがんだ！！どっからどう見ても餓鬼だろが。」

「へ？何いつ…」

わ、ちよつと何するのさ！！」

僕は軽々とスクアーロに持ち上げられる。

その際に両手の長さを見る。うわあ…142cmぐらいだ。
つて…

「何するんです！！おーろーせー！！！！」

「黙れ餓鬼、3枚におろすぞ。」

「自分で歩けるの。」

そう言うが聞いてもらえずそのまま運ばれた。

原作に入ったら僕が3枚におろしてやる。

リボーンの世界だあ！！！！（後書き）

「さーくー者？」

な…なんですか、黒露ちゃん。

「あんたさあ、俺の作品で原作前から入るのが大変って事学んだんじゃないねえの？」

あ、それは十分に。はい。

「じゃ、何でこんな事してんだよ！！！！

あいらにも俺と同じ気持ちを体験させるのか！！？」

いや、そうじゃなくてね

こつやってヴァリアーと接点を作つとかないと後々大変なことに…、

ま、今回はここまでです。

次回もお楽しみにーノシ

生マーマモン（前書き）

なんかサブタイが『生サーモン』みたいだ…。

生マーモン

「ム、スクアーロ。君にはそんな趣味があったのかい？」

スクアーロに担がれて歩き始めてから少ししたとき、後ろから（スクアーロからしたら前）声が聞こえた。

「う”お”お”おい！！！！そんなわけある訳ないだろ！！！！拾った。」

「こんな所でかい？」

あれ？なんか変なムードですか？

もしかしてこのまま殺されちゃうパターンですか！？

キャーーーー、コワイナボク。

「…まあボスに報告しとくとするか。その女を一応アジトに連れて行っておいてくれ。」

そういつて地面に降ろされた。
わー、立つっていいね！！！！

「わかったよ。」

女、ついてこい。」

「はい。」

あ、ほっぺたさわらして。」

「100万ね。」

「…お金とるんですか、」

マンガとおんなじだね…。

「けちー、いいもん。」

そんなことを言いながらマーモンの後ろをついていく。

「そつえば、なんて名前なのー？」

知ってるけど聞いてみる。

だって言っていないのに呼ぶのはおかしいでしょ？

「ム、…さっきのロン毛は「スクアーロ。」何で知ってるんだい？」

「さっき君が言ってたから。」

ボクは君の名前が知りたいんだけど。」

アジト到着（前書き）

そつえば何ですが、揺りかごの前にマーモンは居たんでしょうか？

10 / 14 内容を追加しました。

アジト到着

「ムム…まあいい、マーモンだよ」

「そっかマーモンって言うんだ」

僕は出雲あいら。よろしく、マーモン」

手を差し出すが無視された。…軽くショック

「マーモン、どれくらい歩くの？」

「そうだね…十数分くらいだと思うよ」

その後も少しずつ話していて分かったけど、まだ揺りかごが起こつてないから原作にはほど遠いみたいだ

ん？

そんな昔なのに何で僕はこんな歳になってるんだろ
というか原作の数年前じゃないし…

神様が失敗したんだろうな…、でも神様だし…失敗とかするのかな？

「ついたよ、あいら」

「え、あ…そう？」

因みに会話の中であいらと呼んでくれるように頼んだ
正面を見ると…お城。うんお城

「うわー、おっきい♪お城みたいだー」

「…とりあえず中にはいるよ」

「はい」

「確か…この部屋だよ」

「え！？こんな豪華な部屋？」

マーモンに連れてこられたのは少し奥の方にある部屋、

中は結構広くて32畳ぐらい？で、ベッドとテーブルとソファ…みたいな感じで普通に暮らせる感じ！

…奥にキッチンもあるし

「普通だと思うよ、どちらかというと少し狭いと思うし」

「うそ！？十分だよ！！」

「そう？ま、とりあえずあいらはこの部屋に居てくれない？」

「はい」

マーモンはそういつて部屋を出て行った

その後フカフカもふもふのベッドに夢中になっていたら、いつの間にか寝ちゃいました？

再会（前書き）

あいちゃんのカラが落ち着かない…

再会

「おーい、起きろよー。」

そう言うと同時にぐらいに頬をぺちぺちと叩かれる感覚。
あり？デジャブだー

とりあえず目を開けてみる。

「ややっ！やつぱり神様じゃないですかー」

「…やべっ、なんかうれしい

じゃなくて、今日はあいらに用事が会ってきたんだ。」

神様が僕の近くから離れたからとりあえず僕も起きあがる。
わー、ここってホントに何もないなー。

「今日はあいらに能力の説明をしようと思って」

「そういえば能力って何なの？」

「ふっふーん、聞いて驚くなよ

まず基礎体力が一般人ではあり得ないほどあー「いらない」

次に不死能りよー「いらない」

武術・剣術などの技のしゅう「いらない」

念話・瞬間移動などのちょー「いらない」どういつことだよー！…！」

「いらない物をいらないって言ったらダメなの？」

「いや、ダメじゃないけど」

「じゃ良いじゃん。神様も疲れないし」

「そうだけどさ…、なんか俺にもやらしてくれよ」

なんか可愛そうになってきた

「あ、じゃあ僕にその能力決めさしてよ」

「よし、俺に任せとけ！！！！」

…嬉しそうだ。

能力決定!!（前書き）

きょうはPCで更新してるので、少しは長い…はず？

能力決定！！

「じゃ、まず成長しやすい体。あ、成長って言うのは身長とかじゃなくて体力とか、腕力とか、筋力とか、…できるなら学力も。」
「楽勝楽勝？」

ほんとルンルンだな・・・。

「続いて…あ、怪我や病気を起こし難い丈夫な体。大きな怪我をしそうな事があっても多少の怪我で済むように。病気も。」

けど、寿命は一般的でいいから。」

「え！？寿命一般と一緒にいいのか？」

「うん、いいよ。僕長生きしたいわけじゃないから。」

「…ほい。次は？」

少し考える。どんなのがいいかなー！。

「あ…、」

「どうした？」

「いや…、」

両親が欲しいって言うても今居ないから無理だろな…。

「あー、じゃあ日本に着いた時に両親の代わりの人が面倒見て

くれるつてのでいいか？」

「出来るの!？」

「俺は神だぞ、できないことはない!!」

「ありがと。神様」

あ、けどツナの家は嫌だからね。」

「当然わかつてる。」

他になんかあるかな…。

「そう言えば僕って原作にかかわるの？」

「一応その予定だけど？」

やっぱり関わるのか…。

「じゃ、ツナたちよりも1個下の学年ね。」

「良いけどなんでそんなことすんだ？」

「…なんか嫌だから。」

あと原作に関わるんだつたら、僕のリングとかもあるの？」

「もちろん作つてある。リングの試作品、見るか？」

「見る!!」

準備良いな、神様つて。

そんな事を思つたら神様はどこからリングケースを取り出した。

「ほい。」

「わー、つてなんで2つも入つてるの？」

そこに入っていたのは本来山本が付けるはずの雨のリングと知らないリングが1つ。

その知らないリングには雪だるまが描かれている。

「あいらには『^{みぞれ}霰』の守護者をやってもらう。」

「霰って雨と氷の粒が一緒に降ってくるやつ？」

「ああ、だから雨のリングも必要なんだ。山本のやつとは若干違うやつだからな。」

で、もう一つは『雪』のリング。」

よく雨のリングを見ると小さく雪の結晶が描かれていた。

「つけていい？」

「ああ、」

その返事が返ってきたので僕はリングを取り指に付けた。雪のリングを中指に、雨のリングを人差し指に付ける。

「おおー！。かつこいいー!!」

「だろ？結構考えたからな。」

ん？そういえば…。

「なんで『霰』のリングにしなかったの？」

「…ま、いいだろ。」

「ふーん。ま、いいや。ありがと、神様。」

「いや、それはいいけど能力は？」

「え？十分だよ。またなんかあったらお願いするから。」

原作入って武器の作り方教えてもらったりとか。

「えー、つまんねー！。」

「大丈夫だつて。」

「…………ま、いいや。もうそろそろ現実に戻すな。」

「はい。」

リングを外してケースに入れる。

「俺に用事があつたら心の中で読んでくれたら、また俺が眠らせるから。」

「はい。」

また足場が崩れていく。

「あ、あと俺の名前『シン』って言うから覚えといてくれな——。」

「

「……えっ！？神様にも名前あ——」

そこで僕の意識は消えた。

能力決定！！（後書き）

結局あいらちゃん的能力は

・成長しやすい体

・怪我、病気を起こし難い丈夫な体

の2つです。

両親が欲しいって言うのは親のぬくもりを知らないからです。

弟子入り（前書き）

サブタイのまんまです。

それにしても私ってホントに話の進ませ方が下手ですね……。

話がぜんぜん進まない……。

弟子入り

「…あり？夢…だったらかなりショックだよね」

「なに一人で言ってるんだい？」

「マーモン！！いつから居たのさ」

「あいらが寝てからこの部屋に来たんだよ」

そう言つてマーモンは部屋から出て行こうとする

「ちょ、マーモン！！」

「…なんだい？」

マーモンがこっちを振り返る

「僕に稽古をつけてください！！」

しーーーーーん

やっぱりだめだよ…、一応戦いに参加できるようにしておきたいけど

けど、マーモンの口からは意外な答えが返ってきた

「…暇な時ならね」

「…！　ありがとう、マーモン」

「ま、今日はこれから用があるから無理だけどね」
「うん!」

マーモンと稽古♪マーモンと稽古♪

「そういえばスクアールがあいらをつれて来いって言ってたよ
早く行くよ」

「はーい」

マーモンの後ろをトコトコとついていく
それにしても…マーモンと稽古♪

「スクアール、あいらを連れてきたよ」

そういえば僕はこいつに呼ばれてたんだった

迷子なんです

「で、何の用なのさ？」

もつといっぱいマーモンと話したかったのに

「…正直に答える、お前はどうかやってあそこに入ったんだ？」

「……」

まさかここで「神様に落とされました」って言っても信じないだろうし…

「…迷子になってたんだよ」

「あそこは一般人は入れないようになってる」

それ遠回しに自分は一般人じゃないって言ってるよね

「迷子なもんは迷子なの!!!」

それに怪しいと思うんだったら僕を殺したらいい話だよ」

「…」

スクアーロは黙ってしまった

「…話しが終わったんなら僕は部屋に帰らせてもらうよ。

僕をどうするかは勝手に決めて貰って構わないから」

そう言っただけで部屋から出る

「話は終わったのかい？」

部屋を出るとマーモンが居た

「うん終わったよ、待っててくれたの？」

「一応僕はあいらの世話係だからね」

そう言いながらマーモンは僕の肩に乗った。か…可愛い

「ありがと、ねえマーモン」

「…なんだい」

「お腹すいた」

僕のその言葉は一変に空気を壊した

あのがき、目に曇りがねえ。

殺されることに未練もねえみたいだ。

「おもしれえ、出雲あいら。」

お腹すいた（前書き）

ルッスーリアなに気書きやすい。

お腹すいた

「ルッスーリア、居るかい？」

「ええいるわよ、あらっ？その子は？」

生ルッスーリアだ！！

「出雲あいらです」

「あいらがお腹がすいたらしいからなんか作ってやってよ。」

「あらあら、わかったわ。ちよつと待ってなさいよ」

ルッスーリアが消える

「マーモンあのオカマさんダレ？」

「ルッスーリアだよ、何かあつたら相談とかしてみたらどうだい」

「ふーん」

相談係なんだ…

「できたわよ」

「わーい」

ルッスーリアが運んできた料理を食べる

「おいしー」

冗談とかお世辞抜きでおいしい

「気に入ってもらえたみたいで嬉しいわ」

「ルッスーリアさんのことルッス姐って呼んで良い？」

「ええ、良いわよ」

妹が出来たみたいで私も嬉しいわ

「やった、ルッス姐また今度料理教えてね」

「もちろんよ」

ルッス姐と仲良くなつた！！！！

やったね

「まさかルッスーリアと仲良くなるなんてね」

「だってルッス姐かっこいいもん!!」

「そういえばマーモン今日用があるって言ってなかったっけ?」
「だから今日は稽古しないんじゃない?」

「もう終わったよ」

「早っ!!!」

「今からでも稽古つけようか?」

「ホント!? マーモンと稽古?」

「嬉しいな♪」

初稽古（前書き）

しばらくここにちを更新していこうと思います。

初稽古

場所を移動して練習場。

「マーモン、修行って何するの？」

「…あいらは何をしたいんだい？」

そう言えば…何したいんだろ。

「んー、マーモンっていつもどうやって戦っているの？」

「僕は幻術を使ってるよ。」

「じゃそれ。」

「……。」

こうして僕はマーモンから幻術を習うことになった。

稽古を始めて1時間もかからず僕は幻覚を作れるようになった。

ま、すっごい簡単なやつだけど。リンゴとか、犬とか。

「あいら、君は昔こういったことをやったことがあるんじゃないのかい？」

「うつん。ないよ全く。」

しいて言うなら神…シン様の能力のおかげだね。

マーモンによると僕が1時間かからずやったことは普通の人なら何か月と掛かったりするものらしい。

別に頭でその物事を強く思っただけで目の前で組み立ててるみたいなものじゃないの？

「じゃ、しつかりその幻覚を保っていなよ。」

ちなみに今僕の目の前にはさっき作った犬が出ている。

「え？どういう」

「こういうことだよ。」

急に足元が揺れだし、ぼろぼろと崩れていく。

「つえ！？ちょ…！！」

思わずパニックになり幻覚が消えてしまう。

「はい、そこまで。」

足元が元通りになる。

「幻覚？」

「そうさ、幻覚を作るには集中力があるって言っただろ？」

相手が幻覚を使ってくるつもりでしつかりと幻覚を保たないといけない。

「

…集中力が大切なんだ。

「ム、もう時間か…。」

「マーモンどっか行くの？」

「…少しね。あいらはここで練習をしときなよ。
宿題も出しとこうか？」

宿題…。

「うん、練習するのに目標も必要だから宿題ちょうだい。」

「じゃ、次の稽古でまたさっきみたいにするから、幻覚を保てるようにしておくこと。」

「はい。行ってらっしゃい。」

マーモンは練習場から出ていく。

「よし、練習だ！！」

王子登場

「練習つて言ってもどうしようね、ルタ」
「わん」

とりあえずまた幻覚で犬を出して名前をつけてみた
ちなみに犬種はポメラニアン

「やっぱ座禅とかかな」

「わん」

「うるさい人の近くに行つてルタをずっと出しといても良いかな」

「わん」

「……………」

「わん」

今度はもうちょっと鳴き声にリアリティを出そうと

練習所の戸が開く音がする

「あれ？マーモン居ねえの」

この声はまさか

「さっきマーモンなら出ていったよ」

「そ、であんたダレ」

ベル来たー！ー！ー！！

「出雲あいらです、そういうお兄さんは？」

「オレの事知らねえの？まいいや。オレはベルフェゴール、ベルで
良いよ」

「うん、でベルはマーモンに用事？」

「ま、そんなとこ。あんたは？」

あんたじゃなくてあいらなのに……

「僕は今までマーモンに幻術を習つてたんだよ」

そういつてルタを見せる

「へーなかなか出来てんじゃない」

「でしょ」

いやー実は誰かに自慢したかったんだよ

「今は何してんの？」

「集中力を上げるようにマーモンに言われたんだけどどうやったら集中力が上がるかなって」

「ふーん、じゃオレも付き合ってやろうか？」

「え！？いいの？」

ベルとも稽古！？

王子と稽古（前書き）

なんかベルの話し方が違う気がする…

王子と稽古

「でも何するの？」

そう聞くとベルはナイフを取り出した

「今からあいらに向かって投げていくからよけてみる…よ!-!」
今あいらって呼んだ!??ってそれより

ベルがナイフを僕に向かってゆっくりと投げてきた

「ま、そんな感じでナイフに集中して避けていけば？」

そう言いながらベルは次々とナイフを投げてくる

あ、何気これ楽しい♪

「ベールーもつと投げてきていいよー」

「ふーん、それなら」

ベルがまたナイフを投げてくる

ま、避けるけど

「？」

腕がなんか熱い。見てみるとそこには切れた跡が

あ、原作で見たことあるやつだ

「触れてもないのに腕が切れた」

「そ、気をつけるよ」

ベルがナイフを投げそのたびに体のあちこちが切れていく
傷は浅いからあんまり血もでないけど

「…ワイヤー？」

とりあえずタネは分かっているって事をアピールしとこ

「ピンポン、それが分かったら逃げて見ろよ」

「それはもちろ」

くう

お腹の鳴る音って情けないよね

「あ、お腹すいた」

「…じゃ終わるか」

そう言ってベルはナイフをおろした

「ベルまた稽古つけてね」

「また暇な時な」

そう言ってベルは練習中を去っていった

…ルッス姐の所行こ

本当の事を言つと

ルツス姐の所に行つてまたご飯を食べさせてもらった
ほんとルツス姐料理上手いな…

そして今部屋に戻つてきている
もちろんルタも一緒にいる

「ルーター」

「わん」

ルタが僕の元に駆け寄ってくる、そんなルタを抱き上げそのままベ
ットへダイブした

「ねえルタ、僕この後どうなるんだろうね？」

「わふ？」

おお、稽古の成果が出た

「僕スクアーロにあんな事言つたばかりだけど、こんな生活がもつ
と続いてほしい」

「くうん」

ルタが僕の頬をなめる

「くすぐつたいよ」

「わん」

そのままルタとしばらくじゃれあつてそのまま寝てしまった

「おはよー」

朝お腹がすいたからルツス姐の部屋に行く

が、ルツス姐はいない
「あれ、ルツス姐？」

少し探したけどルツス姐が見つからないので空腹を紛らわせるために
とりあえず部屋に戻る

←

ベットに潜り二度寝

おやすみー

あいらは知らなかった

寝ている間にあいらに関する会議が行われていたことを

本当の事を言つと（後書き）

今回短い…

次回はあいちゃんに大きな出来事が…！？

入隊！（前書き）

10/7 内容を少し追加しました

入隊！

「…もうこんな時間だ」

朝起きたのが9時頃で今は昼の1時、寝すぎたな…

「あいら起きたのね」

「あれ？ルツス姐どうしたの？」

部屋にルツス姐が居た、いつ入ったのさ

「朝部屋に来なかったから心配になってさっきここに来たのよ」

「ルツス姐…ありがと」

「いいわよ、じゃアタシはご飯温めてくるわ」

そう言つてルツス姐は部屋を出た

そういえば僕、いつルタを出したんだろ？記憶にない…

「あいら入るわよー」

ルツス姐がご飯を温めに行っている間ルタと寝ころんでじゃれてたから起きあがり、ドアを開ける

「どーぞ」

「ありがと、あいら」

ルツス姐はあつつあつのドリアを持ってきてくれた
うまうま

「そういえばコレ、あいらに渡してくれて頼まれてたのよ」
そういつて袋を渡された

「開けていいかな？」

「いいんじゃないかしら」

急いでドリアを食べて袋を開ける

「これ…」

中に入っていたのはイタリア語で何か書かれている紙が3枚と、黒色のコート

「その紙は入隊に必要な書類よ、それとコートはこの隊服」

「えっ？」

どういうこと…

「今朝幹部会議があつてそこで決まったのよ、あいらをここに入隊させるって事が」

「！！ ホントに良いの…？」

「ええ、もちろんよ」

思わず涙ぐみそうになった

ファミリーとの顔合わせ1（前書き）

ちょっと長いので1ということです。

中途半端ですので、もう話を待った方がイライラが少なくて済むかもしれません。はい。

ファミリーとの顔合わせ1

書類が全部イタリア語だったからルッス姐にイタリア語を教えてもらいながら書いていった

おかげでイタリア語をマスターしたZE

「ねールッス姐この隊服着ていいの？」

「もちろんよ、それ着て書類持っていきましょうか」

「はい」

早速コートを着てみる、おおかつこいいー！

ちよつと長めで装飾などは他の人と同じコート

「ルッス姐ルッス姐！！」

「似合ってるわよ」

ルッス姐にほめられた

「じゃ、行きましょうか」

「うん」

ルッス姐と一緒にどっかの部屋に行く

ルッス姐はドアを軽くノックした

「失礼するわよ」

「しつれーします」

部屋には行つた瞬間大きな殺気

「う”お”おい！おせえぞ」

殺気を放っているのはスクアーロじゃないみたいだ、周りを見ると幹部の5人とXANXUSが居たから絶対この殺気を放ったのはXANXUSだ

「書類が意外と手間取ってたのよ」

「だって全部イタリア語だったもん」

言い訳を言っがどうせ相手にせず怒鳴りちらすんだろつな

「う”お”お”い！遅れてきた態度がそれか」

「うるせえ」

そついいながらザンザスはスクアーロを蹴り飛ばした

「ルツス姐、あの人ダレ？」

「今日からあいらのボスになる人よ」

ファミリーとの顔合わせ2（前書き）

この作品のザンザスはロリ…子供好きです

ファミリーとの顔合わせ2

「それって僕も挨拶した方がいいよね？」

「そうね」

その言葉を聞いてすぐザンザスの方へ行き

「はじめましてボス、僕出雲あいらです」

その場の空気が固まった

しかしそれはすぐに終わった

ボスの笑い声で

「…こいつはおもしろい奴が入って来たな、出雲あいら気に入ったぜ」

「ありがとう」

それを見た1人の男がなんか言い出した

「ボス！！生まれも分らないような小娘を気に入るんですか！？」

「うるせえ、黙れ」

「レヴィ嫉妬は醜いわよ」

…あれそんなのいたっけ？

「ほらおっさんのせいであいら困ってんじゃないん」

うん、すごく困ってる

「マーモン、あの気持ち悪いの何？」

「レヴィ・ア・タンだよ」

「ふーん」

レヴィはなんか叫んでいる

スクアーロよりうざいな…

「そっといえばボス、僕にもやっぱり任務とかあるの？」

「カス鯨に任せてある」

「カス鯨―僕の初任務はいつ？」

「明日だあ」

明日だと！？

初 任 務（前書き）

9 / 2 3 内容追加しました。

1 0 / 7 さらに内容を追加しました。

初 任務

にじふぁん「うー、マーモンまだ着かないの？」

今僕は走ってる、どこかって？

敵のアジトの中

昨日はカス鯨に言われた任務の為特訓（マーモン、ベルとなぜカル
ツス姐の稽古）があつて疲れきつて部屋で寝たはずなのに、朝起き
たら敵のアジトの上空でそこで初めて任務内容聞かされて内容は『
敵アジトの全壊（ファミリーは皆殺し）』とか言われるし…

すぐにヘリから落とされてアジトの中をマーモンと二人で手当たり
次第に回って殺していつてる最中

「あいら次の角を右」

「はい」

曲がると敵が居たので昨日ベルから貰ったナイフを投げる

「ベルのナイフ、形に特徴あるから投げにくい…」

「じゃあ他ので戦ったらいいじゃないか、全部結構できてたし。行
くよ」

マーモンが急かすのでまた走り出す、ちなみにマーモンは僕の肩に
乗ってるだけで戦いはしない

あと、マーモンがさっき言った他のというのはルツス姐から習った
ムエタイやマーモンから習った幻覚のこと

ムエタイは前衛だし幻覚は後衛なので1人の僕はしぶしぶナイフを
使っている

折角だしカス鯨とボスにも教えてもらおっかな…

「ム、その柱で最後だよ」

「分かった」

僕はカス鯨から渡された爆弾を設置して柱に何も無いような幻術を施す

後は逃げながら残りを片付けたりいいだけ

違う道を通っていくが下っ端のさらに下みたいな人ばかり

「え、もう出口？敵の大物は？」

「とつくの昔に殺したよ」

「嘘！？つまんなーい」

そういいながら外に出て、アジトから離れてスイッチを押した

アジトは跡形も無く崩れ落ちた

「…何人が残しておいたらもしかしたら復讐とかしに来てくれたかな？」

「やめておきなよ、どうせ同じようなレベルばかりさ」

「そっかあ…」

そんな話をしながらへりに乗った

報告ののち

「あーやつぱりお家はイイネ!!」

「…何言ってるんだい？」

今僕らはヘリ旅行から帰ってきてアジトの中にいる

「ちゃんと報告書持ってるかい？」

「持った——!!」

ヘリの中で酔いと戦いながら頑張って書いたもん

「じゃあスクアーロの所に行くよ」

「はい」

カス鯨の所に行くのか…

「失礼するよ」

「同じくー」

マーモンの後に続いてスクアーロの部屋に入る

あ、普通の部屋だ…

「あいら、報告書」

「うん、はいどーぞ」

カス鯨に報告書を渡す

「ああ」

その場でちらつと報告書を読んでスクアーロは机へと投げた

僕の傑作が…!!

「マーモンには話があるから残れえ」

「じゃ、僕部屋に戻るー」

そう言つてカス鯨の部屋を出た

「リター何する？」

部屋に戻ってリタを出す

「わんわん！」

「あー確かにそれいいな」

「わん！わん！」

「いや、そんな気持ちじゃないな……」

「わふ？」

「うん、そうしょっか」

ちなみに僕は犬語をマスターしたからリタが何言ってるか分かるのさ

リタを頭の上に乗せて部屋を出る

「あれ、あいじゃん」

「どうしたの？ベル」

部屋を出るとベルがいた

「いやヒマだからブラブラしてた、あいらは？」

「僕は今からボスの所に行くけど？」

「げえ…ボスとこ行くの？」

ベルは目が隠れているけどいやそうな顔だった

「ベルも行く？」

「いや」

えーなんで？ボス優しいのに……

一人でボスの部屋に行く、すると先客が居たようで話し声が聞こえた……いやこれは盗み聞きじゃなくて、聞こえたただだから！！

「……………少しだ」

「もっと……………か！」

「……………で、……………あい……………」

「……………考え……………」

ん？何の話なんだろう？

全然わかんないなあ・・・

とりあえず部屋に戻った

稽古漬け

しばらくしてからまたボスの部屋に行った

「ねーボス、さっき何の話してたの？」

そう聞くとボスの殺気が増す

「…聞いてたのか」

「うつん、なんか聞こえただけ」

「そうかならいい、しっかりとベルやマーモンに稽古付けてもらえ」
そう言った後しばらく話してから部屋を追い出された

「しかたない、マーモンの所行こっか」

「わふ」

そのままマーモンの部屋に行った

「マーモン！！暇だったら稽古付けて！！」

「ム、やる気十分だね」

「うん、僕は今燃えている！！」

そう言いながら幻覚の炎を背中の方で出す

「じゃあ…」

そう言うと同時にマーモンは大量に分身を出す

「「この中で本物を見つけてみなよ、練習場につくまでにね」」

「ええ！！？」

結局練習場に着くまでの間には見つける事が出来なかったけど、練習場に着いてからは見つける事が出来た

「時間がかかりすぎてる」

「うつ…難しいよ…」

「あいらは幻術を見破るのを練習した方がいいね」

その後何回か練習して最初の半分の時間で見つける事が出来るよう

になった

「そういえばマーモン、カス鯨と何の話してたの」

「…任務の話だよ」

「そっか…」

…もうすぐかな『揺りかご』が始まるのは

稽古漬け（後書き）

はい、もうすぐでやっと揺りかごです！！！！

揺りかごが終わると原作にぐんっと近づきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5370s/>

転生者は雲の守護者

2011年11月11日03時38分発行